

蘇軾の「自新」の記録

—黄州における三年間の「正月二十日」の詩について—

山口 若菜

一、はじめに

本稿は、北宋の文人蘇軾（字子瞻、号東坡、一一三六一—一〇一）の三首の詩、「正月二十日、往岐亭、郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院」（以下「詩1」と称する）、「正月二十日、與潘郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女王城作詩、乃和前韻」（以下「詩2」）、「六年正月二十日、復出東門、仍用前韻」（以下「詩3」）について、その制作意図を考察することを目的とする。これらの詩は、蘇軾が烏台詩案^(一)の結果流罪となった黄州（現在の湖北省）の地で作られた。三首の特徴は、元豊四年（一〇八）の正月二十日に作られた「詩1」を原詩として、翌元豊五年、翌々年の元豊六年のそれぞれ正月二十日に、自作の「詩1」に対する次韻の詩として「詩2」「詩3」を作っている点である。この三首の詩題には詩の制作日と背景が詳しく説明されており、それぞれを比較して読ませる意図が明確である。蘇軾は、毎年同日に自作への次韻の詩を作ることと何を表現しようとしたのだろうか。以下では、この疑問に対する一つの解釈を提示したい。

なお、本稿で扱う「詩1」から「詩3」を取り上げた先行論文として、岩城秀夫氏の「梅花と返魂——蘇軾における再起の悲

願」^{三三}がある。岩城氏は、蘇軾が元豊三年の正月二十日に「梅花二首」詩（後述）を作っていることから、一連の「正月二十日」の詩は、蘇軾が正月二十日に見た梅花をいつまでも記憶し、かつ、梅の香に政界復帰の望みを寄せるために作ったのだと解釈する。先行論文があるにもかかわらず敢えて同じ詩を論ずる理由は、蘇軾が三年間にわたって「正月二十日」と題する詩を作り続けた意図について、別の解釈の可能性があると考えたためである。

なお、蘇軾の詩のテキストは、馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一）に據った。本文中で蘇軾の詩を引用する場合は、原則として『合注』の巻数のみを示した。また、蘇軾の文章を引用する際には、孔凡禮点校『蘇軾文集』（中華書局、一九八六）の収録巻数を示した。その他のテキストについては、適宜当該箇所を示した。

二、「正月二十日」の詩三首とその解釈

（一）元豊四年——生氣の回復

まず、「正月二十日、往岐亭、郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院」（「詩一」、卷二十一）を見てみよう。

十日春寒不出門 十日 春寒 門を出でず

不知江柳已搖村 知らず 江柳 已に村に揺くを

稍聞決決流冰谷 稍や聞く 決決 氷谷に流るるを

盡放青青沒燒痕 盡く青青を放ちて燒痕を沒す

數畝荒園留我住 數畝の荒園は 我を留めて住せしめ

半瓶濁酒待君溫 半瓶の濁酒は 君を待つて温む

去年今日關山路 去年 今日 關山の路

細雨梅花正斷魂 細雨 梅花 正に斷魂

十日あまり春寒のため外出しなかつたので、まったく気付かなかつた、江柳がもう今年の新枝を村に揺かしていたとは。かすかに聞こえる、さらざらと雪解け水が氷に閉ざされた谷に流れる音が。いちめん青々とした草が存分に芽吹いて、野焼きの痕を覆い尽くしている。禪莊院の數畝の荒園の高趣に私はつい立ち止まり、瓶に半分ほどの濁酒は君にたのんで温めてもらおう。去年の今日はいえ、私は關山の旅路に在り、霧雨の中に梅の花を見て、折しも痛ましい思いに魂を引き裂かれるようであつた。

蘇軾が配流の地である黄州に到着したのは元豊三年二月一日であるから、黄州に住んで約一年後の作である。詩題の「郡人潘古郭三人」とは蘇軾の黄州での隣人たちであり、「東坡八首」詩（卷二十一）本文および付された查慎行の注によれば、酒屋の潘丙、黄州進士の古耕道、菓屋の郭邁である。この年、蘇軾は親しくなつた彼らとともに黄州で初めての正月を迎え、民間の習俗にしたがつて郭邁の家で子姑神の祭りをしたばかりだつた。当時、蘇軾は臨臯亭と呼ばれる水上交通用の駅舎に居住していたが、彼ら三人は、年明け後初めての小旅行に出掛ける蘇軾を送つて女王城東の禪莊院へ一緒について来たのである。蘇軾は旧友の陳慥（字は季常）の住む岐亭へ向かうところであつた。前半の四句は、岐亭へ向かう道すがらに感じた、孟春の張り詰めた空気を動かす生命力を写している。「十日春寒不出門、不知江柳已搖村」は、自分が動かさずじつとしてゐる間にも、季節はめぐり変化していたという事実を実感した喜びが表現されている。頸聯「數畝荒園留我住、半瓶濁酒待君温」は、詩題にいう禪莊院に小休止したときの情景だろう。自然のまま手入れされていない庭園の様子に興味を感じたとき、蘇軾の傍には一緒に楽しんで酒に爛をつけてくれる友人たちがいた。そこで思い出されたのが、ちょうど一年前の自身の姿である。「去年今日關山路、細雨梅花正斷魂」。一年前の正月二十日、一死を免れた蘇軾は長子の蘇邁と二人だけで黄州への旅の途上にあつた。失意の蘇軾は、麻城縣の春風嶺でひっそりと咲く梅花を見て慰められ、この梅花こそ数少ない自分の知己と感じていた。悲しみと不安のどん底にあつた去年と比較すると、たったの一年で随分と前進したではないか。人は生きてさえいれば変わることができる、という感慨がこの詩に込められている。

比較の対象として、元豊三年正月二十日の「梅花二首」（卷二十）を見てみよう。

其一

春來幽谷水潺潺

春來 幽谷 水潺潺

的皜梅花草棘間

的皜たる梅花 草棘の間

一夜東風吹石裂

一夜 東風 石を吹いて裂き

半隨飛雪度關山

半ば飛雪に隨つて關山を度る

春が来て幽谷を流れる水はさらさらと音をたて、くつきりと鮮明な梅花も荒れ地の草といばらの間に花開く。ある夜、春の突風が石を吹き割る勢いで、梅花も半ば飛雪に吹かれるままに關山の路をわたる。

其二

何人把酒慰深幽

何人か酒を把つて深幽を慰む

開自無聊落更愁

開けども自ら無聊 落つれば更に愁う

幸有清溪三百曲

幸に清溪三百曲有り

不辭相送到黃州

辭せず 相送りて黃州に到るを

誰が酒杯をとつて山奥深くにいる我を慰めてくれるだろうか、花開いても淋しく心樂しまず、散り落ちればいよいよもの悲しい。幸いなことにうねうねと三百回も蛇行する清らかな谷川が有つて、快く私を送つて黃州までついて来てくれる。

この七言絶句二首は、蘇軾が梅花の姿に借りて自らの状況を述べた比喻の詩である^(七)。「的皜梅花草棘間」、すなわち、人氣無^(七)い谷の草やいばらの中であつても、他とは異なる麗姿がくつきりと目立つ梅花は、きちんと自分の花を咲かせていた。しかし、「一夜東風吹石裂、半隨飛雪度關山」、ある晩石を吹き割るほどの突風に遭い、容易には散らないはずの梅花もさすがにその身を碎かれ、風に吹き飛ばされる雪のようになって關山を渡り黃州へ向かうというのである。其二には「開自無聊落更愁」と、知り己も無いまま一生を終える悲しみを述べる。「幸有清溪三百曲」一句では、美しい清流に沿つての旅を幸いとしながらも、やはり失意を隠しきれずにいる。突風に吹き飛ばされる梅花は、春風嶺から見えた実景であつただろうが、それ以上に蘇軾の粉碎さ

れた魂の象徴である。「梅花二首」詩をふまえて「詩1」を読むとき、一年後の心境との対照はより鮮明である。蘇軾はもはや「何人把酒慰深幽」という恨みを持つことなく、生来の積極的な性質で思考を切り替え、黄州での第二の人生を快適なものにしようとする。元豊四年五月、蘇軾は馬夢得の助力で東坡を営み、農夫としての生活を始めた^(八)。黄州での新生を試みた蘇軾は、「斷魂」という精神的どん底を味わった正月二十日を起点として、一年ごとに「自新」の成果を書き留めてゆくのである。

(2) 元豊五年——笑顔の回復と時間の愛惜

次に、「正月二十日、與潘郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女王城作詩、乃和前韻」(「詩2」、卷二十一)を見てみよう。

東風未肯入東門

東風未だ肯えて東門に入らず

走馬還尋去歲村

馬を走らせて還た尋ぬ去歳の村を

人似秋鴻來有信

人は秋鴻に似て來たるに信有り

事如春夢了無痕

事は春夢のごとく了に痕無し

江城白酒三杯釀

江城の白酒 三杯釀く

野老蒼顏一笑溫

野老の蒼顏 一笑温なり

已約年年為此會

已に約す 年年此の會を為さんと

故人不用賦招魂

故人用いず 招魂を賦するを

春風はまだ東門から吹き込んでこないが、馬を走らせて、去年行つたかの村へ再び出掛けてゆく。人間はまるで季秋の鴻鴈のように時期を外さずやって来るが、事は春の夢のようにまったく痕跡を残さない。河辺の女王城の白酒は三杯で酔うほど濃く、田舎のじいさんである私は老い衰えた顔だが、にこりと笑んで感じがよい。毎年この会合をしよう、ともう約束してあるので、旧友たちよ、「招魂」を賦して我が魂を招くには及ばない。

前年の「詩1」の状況と異なり、同じ正月二十日でも、この年は「東風未肯入東門、走馬還尋去歲村」というように春風が吹

く時期が遅かった。だが、蘇軾は約束の期日だと早速にも尋春の遊びを楽しむ。頷聯のうち「人似秋鴻來有信」は『礼記』月令の「季秋之月、鴻雁來賓」をふまえた表現で、蘇軾が季節を告げる鴻のように、毎春正確に岐亭へ行くことを指す。一方「事如春夢了無痕」は、白居易「花非花」詩⁽⁶⁾の、

來如春夢幾多時　　來ること春夢のごとく　　幾多の時ぞ

去似朝雲無覓處　　去ること朝雲のごとく　　覓むる處無し

(來るときは春の夢のようで、いったいどれほどの時が経ったことか、去るときは朝の雲のように、消えてしまい探し求めるすべもない。)

と同じ詩意だろう。長く続くと思われる事柄も、消えて無くなるときにはあつけなく、何の痕跡も残さない。頷聯二句には過ぎ去る時間への愛惜が込められており、黄州での日々を意識して大切に過ごそうという蘇軾の積極的な意志が示されている。実際に、純朴な隣人たちとの交際は「野老蒼顏一笑温」と、彼に笑顔をもたらし、満足させている。顔が「温」であるというのは、杜甫「貽華陽柳少府」詩の、

柳侯披衣笑　　柳侯衣を披て笑い

見我顔色温　　我を見て顔色温なり

をふまえた表現で、柔和に微笑んでいるということである⁽⁷⁾。さらに杜甫の詩の表現「披衣」をさかのぼると、陶淵明が南村へ転居した喜びを述べた「移居」其二詩の、

相思則披衣　　相思えば則と衣を披き

言笑無厭時　　言笑して厭く時無し

思いついたときには服を着て(隣人と)集まり、楽しく語り合つて飽きもしない⁽⁸⁾、という二句に辿り着く。「温」一字と直接には繋がらないが、蘇軾の喜びは、陶淵明の「移居」詩の状況と類似のものだろう。

「詩2」の尾聯「已約年年為此會、故人不用賦招魂」は、蘇軾の旧友たちに向けて、彼らの心配を解く言葉である。「招魂」

とは、宋玉の作とされる「招魂」である。『楚辭』招魂に、

宋玉、憐哀屈原、忠而斥棄、愁瀝山澤、魂魄放佚、厥命將落。故作『招魂』、欲以復其精神、延其年壽、外陳四方之惡、內崇楚國之美、以諷諫懷王、冀其覺悟而還之也。

宋玉、屈原の忠にして斥棄せられ、山澤に愁瀝し、魂魄放佚し、厥の命將に落ちんとするを憐哀す。故に『招魂』を作り、以て其の精神を復し、其の年壽を延べんと欲し、外は四方の惡を陳べ、内は楚國の美を崇び、以て懷王を諷諫し、其の覺悟して之を還さんことを冀うなり。

というように、「招魂」は遊離した屈原の魂を身中に復帰させると同時に楚王を諷諫するものである。「已約年年為此會、故人不用賦招魂」二句について、岩城氏は以下の解釈である¹¹¹⁾。

この場合、故人とは都にある知友をいうであろうから、招魂の二字は、流謫の人である蘇軾を都によびかえすことを、暗に意味しているのではないか。知友に対して、わざわざ招魂の詩を賦して頂くには及びません、こちらでは毎年の会合を約束して、楽しくしていますから、というのには含意があるのではないか。

蘇軾はこの頃から政界復帰の期待をもちはじめたと思われる。相会する人たちの間で、軾の罪の許される日の早からんことを願うことばの語られたことも、想像に難くない。それに対して、この詩は応えているごとくでもある。

「招魂」に楚王への諷諫が込められている以上、神宗が蘇軾を召還することを願う「招魂」との解釈はたしかに可能である。しかし、「故人」を都にある知友に限定する必然性は必ずしも無いと筆者は考える。そして、「招魂」も「政界復帰」という含意を考えず、碎かれた魂を蘇軾の身に復帰させるという意味で解釈して構わないのではないか。蘇軾は旧友たちに、私の魂は既に無事であるから、もう「招魂」の詩を賦するような気遣いは不要だと述べている。彼は黄州での暮らしに充足感を見だし、それに従い魂は身中に還って来ているのである。元豊五年二月、蘇軾は東坡に堂を築き、「雪堂」と名付けて一面に雪の絵を描いた。以下は、そのことを述べた「雪堂記」の冒頭部分である¹¹²⁾。

蘇子得廢園于東坡之脅、築而垣之、作堂焉。號其正曰雪堂。堂以大雪中為之。因繪雪於四壁之間、無容隙也。起居偃仰、環

顧睥睨、無非雪者。蘇子居之、真得其所居者也。

蘇子廢園を東坡の舊に得、築いて之を垣い、堂を作す。其れを號して正に雪堂と曰う。堂は大雪中を以て之を為す。因つて雪を四壁の間に繪きて、隙を容るる無きなり。起居偃仰、環顧睥睨するに、雪に非ざる者無し。蘇子之に居り、真に其の所居を得る者なり。

蘇軾が不自由ながらも、黄州の生活を出来るかぎり自分の好みに近づけ、東坡に起居することに積極的な満足を見出していることが分かる文である。

(3) 元豊六年——「返魂」の完了

さらに、三年目の「六年正月二十日、復出東門、仍用前韻」(「詩3」、卷二十二)を見る。

亂山環合水侵門 亂山環合して 水 門を侵す

身在淮南盡處村 身は淮南盡處の村に在り

五畝漸成終老計 五畝 漸く成る 終老の計

九重新埽舊巢痕 九重 新に埽う 舊巢の痕

豈惟見慣沙鷗熟 豈に惟だ見慣れて沙鷗と熟するのみならんや

已覺來多釣石温 已に覺ゆ來ること多くして釣石の温なるを

長與東風約今日 長く東風と今日を約す

暗香先返玉梅魂 暗香先づ返る玉梅の魂

高低さまざまの山が環状に合わさり、せせらぎが戸口の間近を流れる家、私は淮南のはての村に居る。この五畝の宅地に晩年を過ごす計画が固まつてきたし、都でもかつて私の居た直史館は廢されたばかりという。江辺の砂州上のカモメと馴染みになったのはもちろん、よく来て釣りをするので岩が温まったままだと分かっている。長らく春風とは今日の遊びを約束してあるが、

漂う香氣から察するにまず梅花の魂を返して咲かせてくれたようだ。

「詩3」では、また一年を経て「詩2」の充足感が既に黃州で「終老計」を成してもよいという達観に変わったことを示している。「五畝漸成終老計、九重新掃舊巢痕」は、東坡の開墾が老後の生活をまかなえる程度に進み、一方で京師の「舊巢」もきれいさっぱり無くなったから、もうここを動く必要も理由も無いということである。「豈惟見慣沙鷗熟、已覺來多釣石温」は、蘇軾が黃州での生活にいかに慣れ、その心がいかに包むところ無く落ち着いているかを表している。「沙鷗熟」は、『列子』黃帝篇の鷗と親しむ者の話を意識した表現である。

海上之人有好瀕鳥者、每旦之海上、從瀕鳥游、瀕鳥之至者百住而不止。

海上の人に瀕鳥を好む者有り、毎旦海上に之き、瀕鳥を從えて遊ぶ、瀕鳥の至る者百住にして止まらず。

張湛の注に、「心和而形順者、物所不惡（心和にして形順なる者は、物の惡まざる所）」という。蘇軾も、鷗が安心してそばへ寄ってくるほど素直な心で隱者の生活を享受している。そうして迎えた三年目の正月二十日に、「長與東風約今日、暗香先返玉梅魂」と、はじめて梅花の暗香が復活する。先に筆者は「梅花二首」詩について、突風に吹き飛ばされる梅花は蘇軾の粉碎された魂の象徴だと述べた。そして、「詩1」の結句「去年今日關山路、細雨梅花正斷魂」は、前年である元豐三年の梅花を回想したものであった。だが、「詩1」「詩2」にそれぞれの年の梅花はうたわれていない。蘇軾の心が十分に安定した「詩3」に至って、玉梅の返魂は完了し、花を咲かせたのである。なお、結句について清代の何焯は、

「先返玉梅魂」、蓋以神宗之必不忍絶棄也。

「先返玉梅魂」は、蓋し神宗の必ずや絶棄するに忍びざるを以てなり。

と解釈する^{〔十六〕}。この解釈をふまえて岩城氏は、

…まためぐり来た正月二十日の梅花に対し、かつての断腸の思いを反芻するとともに、それが単なる追憶に終らず、愛すべきこの花によって慰められ、さらには心を支えられて、梅が香に政界復歸の夢を託そうと、ほのかな希望を抱きはじめるのである。

また、

一命を助けられて黄州へ流されたことは、神宗の意中を確かめ得たことにもなったわけであり、貧しいながらも平穩な日々を送っているうちに、安堵から次第に積極的な政界復帰への望みが生じて来たのである。

と述べる^{〔七七〕}。筆者は、蘇軾の関心は自らの生き方を問い直し精神を全き状態に戻すことにこそあったのであって、必ずしも政界復帰には拘っていないと考える。蘇軾は、正月二十日ごとに自身を振り返って、その状態を詩に記録した。喻えるなら、一連の「正月二十日」の詩は蘇軾自身のカルテである。「詩3」を作ったとき、彼は自分はまだ大丈夫だと確認したのである。同年五月、蘇軾はわざわざ故郷の蜀から取り寄せた好物の「元修菜」を東坡に植え、翌元豊七年の正月二十日には詩を作らなかつた^{〔七八〕}。「黄州団練副使、本州安置」の蘇軾を「汝州団練副使、本州安置」に移す、という貶謫地変更の触れが出されたのは、皮肉にも七年の正月二十五日である^{〔七九〕}。

三、「正月二十日」の詩の制作意図

これまで、「詩1」から「詩3」をやや詳細に見た。そして、これらは蘇軾が毎年同日に自身を振り返り、萎縮した精神状態がどこまで回復したかを詩に表現し、段階的に自身の「返魂」を完了させる過程を記録したものであることを説明した。蘇軾には黄州で内省して生まれ変わろうという心積もりがあつた。その傍証とできるのは、次に挙げる「黄州安国寺記」である^{〔八〇〕}。

元豊二年十二月、余自呉興守得罪、上不忍誅、以為黄州団練副使、使思過而自新焉。其明年二月、至黄。舍館粗定、衣食稍給、閉門却掃、收召魂魄、退伏思念、求所以自新之方。反觀從來舉意動作、皆不中道、非獨今之所以得罪者也。欲新其一、恐失其二。觸類而求之、有不可勝悔者。於是、喟然歎曰、「道不足以御氣、性不足以勝習。不鋤其本、而耘其末、今雖改之、後必復作。盍歸誠佛僧、求一洗之。」得城南精舍曰安国寺、有茂林修竹、陂池亭榭。間一二日輒往、焚香默坐、深自省察。則物我想忘、身心皆空、求罪垢所從生而不可得。一念清淨、染汙自落、表裏儵然、無所附麗。私竊樂之。且往而暮還者、五

年於此矣。：

元豐二年十二月、余、吳興の守より罪を得、上誅するに忍びず、以て黃州團練副使と爲し、過を思つて自新せしむ。其の明年二月、黃に至る。舍館粗ば定まり、衣食稍や給ち、門を閉じて却掃し、魂魄を收召し、思念を退伏し、以て自新の方とする所を求む。從來の舉意動作を反觀するに、皆道に中らず、獨り今の罪を得る所以の者に非ざるなり。其の一を新たにせんと欲すれば、其の二を失うを恐る。類に觸れて之を求むれば、勝げて悔ゆるべからざる者有り。是に於いて、喟然として歎じて曰わく、「道は以て氣を御するに足らず、性は以て習に勝つに足らず。其の本を鋤して其の末を耘かざれば、今之を改むと雖も、後に必ず復た作らん。盍ぞ誠に佛僧に歸し、一に之を洗うを求めざる」と。城南に精舍を得て安國寺と曰い、茂林修竹、陂池亭榭有り。間一二日にして輒ち往き、香を焚いて默坐し、深く自ら省察す。則ち物我想忘し、身心皆空に、罪垢の從りて生ずる所を求めて得るべからず。一念清淨、染汗自ら落ち、表裏儵然として、麗に附く所無し。私竊して之を樂しむ。旦に往きて暮に還る者は、五年此に於てす。：

ここで注目したいのは、「舍館粗定、衣食稍給、閉門却掃、收召魂魄、退伏思念、求所以自新之方。」という部分である。蘇軾は自ら「收召魂魄」して「自新之方」を求めたと述べている。自ら「招魂」を行い「自新」することは、黃州において蘇軾の重要な課題であつた。なお、「黃州安國寺記」は繼連という僧に頼まれたものであるため^{三十一}、「盍歸誠佛僧、求一洗之。」は、敢えてこう書いたのであつて、必ずしも蘇軾が仏教に救済を求めたことは意味しないだろう。しかし、危うく刑死を免れるという経験によつて萎縮した精神を落ち着かせ、さらに自ら鍛え直して強く新生しようという意志のあつたことを、この文は伝える。「黃州安國寺記」は、蘇軾が汝州へ移るために黃州を離れる直前の元豐七年四月六日に書かれ、黃州に在つた足かけ五年の総括とも言うべき文である。蘇軾は黃州で日々自らに内省を課し、「則物我想忘、身心皆空、求罪垢所從生而不可得。一念清淨、染汗自落、表裏儵然、無所附麗。私竊樂之。」というように、しかるべき成果を得たという実感を持つた。一連の「正月二十日」の詩は、蘇軾が「自新」しようと内省し鍛錬した結果得られた心境の変化を、新生を果たし内省が一段落するまで、正確に一年ごとに書き留めた記録の文学である。そして、過去の自分と現在の自分の対比を強調するため、蘇軾はあえて「詩一」に対し

て次韻を重ねるといふ手法を選び取ったのである^(三十二)。

四、おわりに

以上、蘇軾の「正月二十日、往岐亭、郡人潘古郭三人送余於女江城東禪莊院」、「正月二十日、與潘郭二生出郊尋春、忽記去年是日同至女江城作詩、乃和前韻」、「六年正月二十日、復出東門、仍用前韻」三首の解釈と制作意図について、従来とは異なる読解の可能性を提示した。三年間繰り返し返された「正月二十日」の詩は、春風嶺で見た梅花とかつての斷腸の思いを反芻しつつ、梅の香りに政界復帰の望みを託すものではない。蘇軾は黃州において日々新生の道を模索した。一連の「正月二十日」の詩は、蘇軾が自ら生氣を取り返し、笑顔を取り戻して時の流れを楽しみ、「返魂」を果たして安定するまでの変化を表現したものである。一年ごとの心境を自ら対比させ、「自新」による変化を記録することが、三首の制作意図であつたと考える。

注

- (一) 元豐二年(一〇七九)七月、蘇軾・蘇轍兄弟が王安石の新法に反対して讒言にあい、詩に朝政を批判するところがあるとして蘇軾が御史台の獄に下された筆禍事件を言う。蘇軾は知湖州を貶して「黃州団練副使、本州安置」とされた。
- (二) 岩城秀夫「梅花と返魂——蘇軾における再起の悲願」『日本中国学会報』第三〇集(昭和五十三年(一九七八)十月、日本中国学会)に初出の論文。『中国人の美意識——詩・ことば・演劇』(創文社、一九九二年、所収)五頁〜四三頁。
- (三) 王宗稷『蘇文忠公年譜』に、「(元豐)三年庚申、先生年四十五、責黃州。(中略)乃以二月一日至黃州、寓居定惠院、有初至黃州詩」という。

(四)「東坡八首」其七詩に「潘子久不調、沽酒江南村、郭生本將種、賣藥西市垣、古生亦好事、恐是押牙孫、……」とあり、「潘子」「郭生」「古生」について、それぞれ王十朋、施元之、查慎行の注がある。『合注』第三卷、卷二十一、一〇四三頁〜一〇四四頁。

(五)『蘇軾文集』卷十二「子姑神記」(四〇六頁)、及び卷十二「天篆記」(四〇七頁)を参照。

(六)王宗稷『蘇文忠公年譜』に、「(元豐)三年庚申、(中略)案近日『黃州東坡圖』云、先生寓居定惠未久、以是春遷臨臯亭、乃舊日之回車院也。又有「遷居臨臯亭」詩。(中略)四年辛酉、先生四十六、在黃州、寓居臨臯亭。正月往岐亭訪陳季常」と。

(七)『蘇文忠公詩集』の紀昀の評語に「以梅自比」(其一)、「前首借喻、此首說明、章法不苟」(其二)という。ここでは紀昀の説に従った。なお、『紀昀評点東坡編年詩』(北京図書館出版社、二〇〇一年、一函八冊)を参照した。

(八)「東坡八首」叙に、「余至黃州二年、日以困匱、故人馬正卿哀予乏食、為於郡中請故營地數十畝、使得躬耕其中」と。『合注』第三卷、卷二十一、一〇三九頁。

(九)『白氏長慶集』卷十二(四部叢刊初編、集部)。

(十)『分門集註杜工部集』卷十七(四部叢刊初編、集部)。仇兆鰲注『杜詩詳註』卷十五(中華書局、一九七九年)。

(十一)『箋註陶淵明集』卷二(四部叢刊初編、集部)。

(十二)前掲注(二)論文、二〇頁十一行〜二二頁二行。なお、頁数は創文社の著書に據った。以下同じ。

(十三)『蘇軾文集』卷十二、四一〇頁。

(十四)『文獻通考』卷一百七十四に、「元豐三年、改官制、廢館職、以崇文院為祕書省」と。また、『統資治通鑑長編』卷三百二十(元豐四年、辛酉、十一月)に、「是月、廢編修院入史館」と(中華書局評点本、一九九二年、第十三冊、七七三四頁)そして、『長編』卷三百二十五(元豐五年、壬戌、四月)に、「自今更不除館職、見帶館職人依舊」と(七八二六頁)。

(十五)『冲虚至德真經』卷二(四部叢刊初編、子部)。

(十六)『合注』の馮應榴の案語の中に何焯の説を引く。

(十七)前掲注(二)論文、二二頁三行〜五行、及び、二四頁六行〜八行。

蘇軾の「自新」の記録―黃州における三年間の「正月二十日」の詩について―

(十八) 「元修菜」詩、『合注』卷二十二、一一二頁。

(十九) 傅藻『東坡紀年錄』に、「元豐七年甲子、先生四十九歳、正月二十五日、特授汝州團練副使、本州安置。四月一日、將自黃移汝、以留別雪堂鄰里、作「滿庭芳」」。また、『統資治通鑑長編』卷三百四十二(元豐七年、甲子、春正月)に、「賁授黃州團練副使蘇軾言、汝州無田産、乞居常州。從之」と(第十四冊、八二二八頁)。

(二十) 『蘇軾文集』卷十二、三九一頁。

(二十一) 本文に引用した続きの部分に、「寺僧曰繼連、為僧首七年、得賜衣。(中略)七年、余將有臨汝之行。連曰、「寺未有記。」具石請記之。余不得辭。(中略)四月六日、汝州團練副使眉山蘇軾記」とある。

(二十二) 蘇軾は過去の自分と現在の自分を対比する手段として、次韻という作詩手法を用いる傾向にある。このことについては、内山精也氏の「蘇軾次韻詩考」(早稲田大学『中國詩文論叢』第七集、一九八八年)に論究がある。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)